

連載「音楽とキャリア 人生 100 年時代に向けて」

第 7 回：変化の激しい時代に生きる音楽家の学びとは

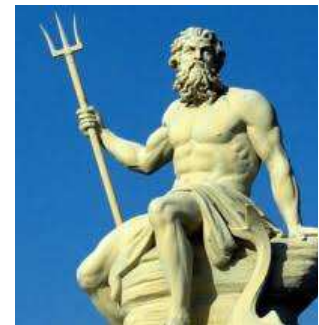
音楽学者 久保田慶一

1. プロティアン・キャリア

L.グラットンとA.スコットはベストセラーとなった「ライフシフト 100年時代の人生戦略」(東洋経済新報社、2016年)の中で、人生100年時代の学びの特徴として、ライフステージが細分化され、「学びほぐし(アンラーニング)」を通して自らの才能の開拓にはげむ「探索期」が繰り返し現れると主張した。このような学習を「生涯学習」と言ってもいいが、ここで言われているのは、学習によって知識を更新し、あるいは経験の蓄積を通して、新しい見方や考え方を獲得して、自己成長を遂げることである。「生涯学習」では教育期を終了してからの学習を継続するという学習行動が重要であるが、「人生100年時代」の学習は、学習者の変容を目的とする「変容的学習」なのである。人が変容的学習を通して、新しい職業領域を開拓すれば、それは「プロティアン・キャリア」と呼ばれるキャリア発達を促すことにもなるであろう。

「プロティアン」という言葉は、ギリシャ神話に登場する海神プロテウスに由来する。未来を予見できた彼だが、その求めに応じるのを嫌って、すぐさま姿を変えた。ここからプロティアン・キャリアとは、ひとつの組織にずっと所属しているのではなく、組織を移動することで、組織内での役割を変え、自己成長を続けることである。

プロティアンの変身(変容)のエネルギーの供給源が、職業期に繰り返し現れる「探索期」における学習であろう。だからこそ、近年の成人学習は「変容的学習」と呼ばれるわけである。



海神プロテウス

2. 子どもの学習と成人の学習

社会教育学者の岩崎久美子は、子どもが学習する動機は、「よい成績をとること、希望する学校の入試に合格することといった学習行動に対する評価、つまり、目に見える報酬といった『外発的動機づけ』(extrinsic motivation)」であるの

に対して、成人が学習する動機は、「このような外部からの学習の誘因（刺激）よりも」、「人間的成長、自己実現といった内面的充足や満足感といった『内発的動機づけ』（intrinsic motivation）である」と指摘している⁽¹⁾。

子どもの教育は「ペダゴジー pedagogy」、成人の学習は「アンドラゴジー andragogy」と呼ばれる。ペダゴジーという言葉はギリシャ語で教師を意味する「パイダゴゴス paidagogos」に由来する。しかし教師と言っても、身分は奴隷で、雇主の子どもを学校に連れていくのが仕事であった。パイドスは「子どもの」、アゴゴスは「導く」という意味であった。他方、「アンドラゴジー andragogy」は「アンドロ andro」と「ペダゴジー」の合成語で、アンドロはギリシャ語で「人」あるいは「男性」を意味する。ちなみに、人造人間は「アンドロイド android」、男性ホルモンは「アンドロゲン androgen」である。

表1は、子どもの学習と成人の学習の相違について、成人教育理論を体系化したM.S.ノールズ考えを、岩崎が表に整理したものである。（岩崎、p.128より）

「自己概念」は少し難しい言葉であるが、簡単に言えば、「自分をどのように見ているか」である。子どもが学校に通う目的は、必ずしも勉強だけではない。友達と遊んだり、給食を食べたりするのが楽しみで、学校に来る子どもだっているだろう。従って、子どもの教育では、ことさら学校での学習が自発的ではなく、さらには友達といっしょだからとか、先生や親が学校で学習するのを当然視しているからといった、本来の自分とは関係のない要因に左右されたりする。この意味で子どもの学習は、環境や周囲の人間に対して「依存的」なのである。子どもは自分が学校の「児童・生徒」であると思っているかもしれないが、学校での「学習者」だけであるとは思っていないであろう。

表1：子どもの学習と成人の学習の違い

	子どもの学習 (ペダゴジー)	成人の学習 (アンドラゴジー)
1. 自己概念	依存的	自己決定的
2. 学習教材	教師、教科書、教材	経験（豊かな学習資源）
3. 学習方法	同年齢対象の同内容教授 (標準化されたカリキュラム)	討論、問題解決事例学習、シミュレーション、ワークショップなど
4. 学習内容	教科内容の習得	現実生活の課題や問題への対応
5. 学習の目的	将来への投資	生活への即座の活用

これに対して、成人の学習は義務でもないし、誰から強制されたものではない。自分で決めて学んでいるので、「自己決定的」なのである。もし会社から資格の取得や英会話の学習を命じられたりした場合、これは成人の学習ではなく、子ど

もの学習なのである。つまり、子どもと成人の区別は、年齢上の区別ではなく、依存的であるか自己決定的であるかという、心や態度の区別であると言えるだろう。

3. リカレント教育とは

リカレント recurrent は英語で、「反復する」、「再発する」、「周期的に起こる」という意味である。一度治癒した病気などが再発したり、そもそも完治は難しかったりする病気の名称に使われている。しかしカレント current は「現在の」、「今流行している」などの意味もあって、リカレントは再度「時流に合わせたものにする」という意味が含まれるように思われる。「アップデート」することである。

recurrent education はリカレント教育と呼ばれたり、ときに「回帰教育」や「還流教育」とも訳されたりする。ここで重要なことは、リカレント教育は確かに大学卒業後に再度大学などに入学して、学業を「再発」させることであるが、同時に、新しい教育を受けて、これまでの知識をリニューアルし、新しい知識との融合をはかる、「学びほぐし」であることを、忘れてはいけない。

表 2：成人の大学でのリカレント教育

成人の大学でのリカレント教育	
1. 自己概念	自己決定的
2. 学習教材	教師、教科書、教材 + 経験（豊かな学習資源）
3. 学習方法	討論、問題解決事例学習、シミュレーション、ワークショップなど
4. 学習内容	現実生活の課題や問題への対応
5. 学習の目的	将来への投資

表 2 は、表 1 に対応させる形で、成人になってからの大学でのリカレント教育の特徴を、筆者が整理したものである。

大学での学びなおしが「投資的」とあるということは、グラットンとスコットの前述した著書の中で強調された「探索期」において、学習者が「エクスプローラー」として行動しているからである。つまり、自分の潜在的な能力を見出し、発見された能力を發揮できる仕事を、新たに探し求めることに直結しているからである。大学での学び直しが、短期の講座やカルチャーセンターでの学習とは、多少異なる点だろう。

もうひとつの大切なことは、大学あるいは大学院で学ぶことで、学位を取得で

きる点である。特にリカレント教育では、20歳代に取得した学位とは異なる種類の学位を得ておくといいたい。このふたつめ、あるいは3つめとなる学位の効果は、その後の人生において絶大な効果を発揮する。さまざまな学問分野に関心をもって、幅広い教養をもっていることを示すだけでなく、その人の人生観や人となりを実に表すからでもある。

リカレント教育をはじめの動機は、人によってさまざまであろう。現在の仕事を継続していくうえで必要となったり、雇用者から半ば強制的に学ばされたりする場合もあるかもしれないが、一方で転職を目的に新しい学問分野を学ぶことだっているだろう。18歳のときに何らかの理由で、入学したい大学に進学できずに別の分野を学んだが、年齢を重ねるにつれて、どうしても勉強しなくなったという人も多いただろう。これを「未達の課題」という。このような課題に気づいてしまうと、人は心理的に不安定になり、「認知的不協和」の状態になると言う。そしてこの不協和を解決するために、人は新たな行動を起こすわけである。実際に行動を起こすまでには、配偶者や子ども、あるいは自分の親だけでなく配偶者の親とはいろんな面で「折り合い」をつけなくてはならないことが多く、不協和に気付いたからといって、すぐに行動に至るわけではない。

いずれにしても、自分への気づきや課題や問題につまずくことが、「探索」の旅に出る動機になることが多い。いつも回りの人間が課題を与えてくれるわけではなく、自らで課題を見つけることも必要なのだ。だからこそ、探索期の学習によって自己変容が生じるのであり、また自己変容をすることを目的に、探索という冒険にでるわけである。

4. プロティアン・キャリアの原動力

「人生100年時代」となり、職業期が長くなるばかりである。しかしその間に生じる社会の変化は激しくなる一方である。若い頃に高校や大学で学んだことはすぐに時代遅れになり、最初の大学で取得した学位も就職する際には「ご利益」があるかもしれないが、就職してしまうと、「大卒」というお飾りでしかなくなる。だからこそ、別の学問分野の学位が必要となるわけである。

こうなると、独学で学ぶか、講座に参加するか、e-ラーニングを活用するか、あるいは、大学院に社会人として入学するか、何らかの方法で、目前の仕事上の課題や自らの「未達の課題」に対処するために学習を継続させていかなくてはならないことは、すでに述べたとおりである。

やみくもに資格や免許を取得すればいいというものではない。しかし学位と違って、資格と免許はその人自身の表現であり、「なりたい自分」を体現したものである。大いに資格と免許を活用してもらいたいと思うし、それらが活かせるキャリアをめざしてはどうだろうか。

もし真のプロティアン・キャリアを歩みたいと思うのであれば、学位・資格・免許などを活用するのがいいだろう。これらこそ、プロティアンの変身の原動力

になるのだ。グラットンとスコットは 100 年時代の人生に必要なのは「無形資産」であると言ったが、学位・資格・免許などはまさに、「無形資産」のとりわけ、「変身資産」と呼ばれるものなのである⁽²⁾。これらは取得すれば、決して失うことがないのだ。筆者はこれを「キャリア形成資産」と呼んだりもしている。

5. エンプロイアビリティの向上

現代社会では、あらゆるものの変化のスピードが速くなっている。これにつれて人生も短くなってくればいいのだが、逆に長くなっているのが大変なわけだ。要するに、現代人は昔の人間よりも、多くの変化を経験しなくてはいけなくなっている。何かが変わるたびに、これまでとは異なる、つまり新しいことを学んで、それをマスターしていかないと、世の中の流れについていけないからだ。変容的学習が求められる状況が、今ここにある。では、このような変容的学習を継続して、変幻自在なキャリアを形成していく意味は、どこにあるのだろうか。

筆者が最近翻訳・出版した本に、『音大生のキャリア戦略』（原書は 2012 年の出版）がある⁽³⁾。原題は、“Life in the Real World: How to Make Music Graduates Employable”である。直訳すると、『実社会での生活：音大卒業生が雇用されるようにするための方法』となる。Employable という形容詞の名詞形がエンプロイアビリティ employability である。

少しかみ砕いて説明すれば、「リアル・ワールド real world」とは実社会、あるいは職業世界のことである。音楽大学を卒業して、音楽家としての仕事をして働かなくてはならない世界である。エンプロイアブル employable は、「雇用する」という意味のエンプロイ employ と「～できる」という能力を意味するエイブル able の合成である。つまるところ、「雇用される能力」を指している。エンプロイアビリティが高いということは、どんな職業にも通じる能力が高いということになる。高い人が増えると、職業上の流動性が増し、個人のキャリアもよりプロティアンになっていくだろう。

音大生や卒業生のエンプロイアビリティを高めるというのは、どういうことなのだろうか。ひとつは、例えばピアニストの場合、演奏のスキルを高める以外に、作曲、編曲、即興の能力をつけ、さらに文章を書いたり、コンサートを企画したりする能力を高めることである。このような何でもできる人に、仕事やお金が集まってくるのは当然で、そのようなマルチ・タレントの芸術家は多い。

もうひとつは、音楽以外の知識や技能を高めることである。例えば、この連載でも紹介したティーチング・アーティストのような仕事をする人には、人の発達や心理、教育学の知識が必要であるし、高いコミュニケーション能力、人前で発表できる能力などを修得していなくてはいけない。アクティビティを導入する前に、参加者の心を解きほぐすために、アイスブレイクにはどのような方法があることを知っていなくてはならない。アイスブレイクの方法などは、心理学、経営

学、教育学など、さまざまな領域で学ぶことができる。

エンプロイアビリティを高めることで、ひとりの人間がさまざまな役割を担い、さまざまな仕事ができるようになる。これを「ポートフォリオ・キャリア」と言ったりする。金融資産を株式や預貯金に配分して管理するのと同じように、一人の人間の中で複数の能力が、複数の仕事やキャリアとしている共存する状態を表わしている。しかも安定しているのではなく流動的で、ある能力や仕事は突出して、次の段階のポートフォリオ・キャリアで中心的になることがある。こうなれば、ポートフォリオ・キャリアはプロティアン・キャリアの状態になっていると言える。要するに、「私はピアノしか担当できません」、「私は音楽以外のことはわからないし、なにもできません」と発言できない時代になったということだろう。

このような時代になった今、音楽大学への進学をめざす人、将来の音楽家を教育する音楽大学、そして音楽大学を卒業してすでに音楽家として活動している人、週末だけプロの音楽家として活動している人、なんらかの形で音楽と関係して生活している人、生きている人は、これからどのようにすればいいのであろうか。しかもいつ終息するかもわからないコロナ・パンデミックに直面した我々は、この危機的な時代を乗り切るためには、プロテウスのように「変身」していくしかないのだろうか。この問題や課題については、本連載の第9回と第10回で詳しくとりあげてみたいと思う。

註

- (1) 岩崎久美子 成人の発達と学習 一般財団法人 放送大学教育振興会 2019年、p.125.
- (2) 「無形資産」、「変身資産」、「キャリア形成資産」については、拙著『大学では教えてください音大・美大卒業生のためのフリーランスの教科書』（ヤマハミュージックメディア、2018年）を参照してください。
- (3) ドーン・ベネット（編著）『音大生のキャリア戦略』（久保田慶一・編訳）、春秋社 2018年.